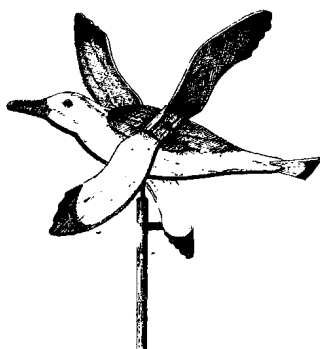


松下竜二

底ぬけ ビンボー 暮らし



底ぬけ
ビンボー
らし



松下竜一

松下竜一（まつした・りゅういち）

一九三七年大分県中津市に生まれる。豆腐屋自営をへて、作家となる。一方で、豊前火力発電所建設反対運動を契機に市民運動をはじめ、リーダーとなる。この運動の機関誌「草の根通信」は一九七三年に創刊され、現在も刊行されている。本書は、この「草の根通信」一九九〇年七月号から一九九五年六月号に掲載されたものに加筆した作品である。

底ぬけビンボー暮らし

一九九六年九月二十五日 第一刷発行
一九九七年一月十日 第六刷発行

著者 松下竜一

発行者 柏原成光

印刷 中央精版印刷

製本

発行所 筑摩書房

〒二二 東京都台東区蔵前二一五―三

振替〇〇二〇一八―四二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三二 大宮市柳引町二六四 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四八五・一〇五三

目次

前口上	7
一 満二十周年記念の日に	8
二 泣いていました	14
三 大きな買物	20
四 本が生き残りました！	25
五 “障害”をのりこえる愛	31
六 今年はまた一段とハラハラ……	38
七 巣立ちのとき	43
八 結構な御身分ですねえ	49
九 ヒューマンな顔を	54
十 真夜中のホテルで	60
十一 おさなともだち	66
十二 痛みの原因は……	73

十三	文部省の怠慢である	78
十四	カモメのおじさん	84
十五	春を待ちつつ	90
十六	おちることをのぞんでみたが	96
十七	星の降る夜に	105
十八	お彼岸の日に	110
十九	帰って行った秀川さん	116
二十	カモメのパン代	122
二十一	カプセルの中で	131
二十二	うちの娘	137
二十三	底ぬけの散歩	143
二十四	一〇万円のスピーチ	148
二十五	変節などするものか	153

二十六	夜の川辺の小宴	159
二十七	父ののど仏	165
二十八	初めて撮った写真	170
二十九	母親になったチェリー	176
三十	“病魔”よ驕るなかれ	182
三十一	いやはや大変です	190
三十二	こんな内情ではねえ……	195
	ちょっとしたあきがき	202

底ぬけビンボー暮らし

装画 高瀬省三

前口上

一九七三年春に大分県中津市という一地方で創刊された月刊ミニコミ誌「草の根通信」が、満二十三年を超えていまだに発行され続けていることは、ミニコミ界の七不思議の一つといえるかもしれない。七〇年代に簇生した同種の反公害・反開発の市民・住民運動のミニコミ誌は、ほとんどがその姿を消して久しいのだから。

かくも「草の根通信」が生き延びている理由はいくつか考えられるが、発行者である「売れないものかき」松下センセへの同情が大きいせいだと思われる。

病氣と貧しさにあえぎ続ける松下センセとその一家が、はたしてこの世知辛い世を生き延びられるのだろうかとはらはらせることで、読者をつなぎとめてきたというのが案外真相に近いのではあるまいか。

本書に収録するのは、「草の根通信」に連載した松下センセの赤裸々なる生活記（一九九〇年七月～一九九五年六月）であり、どっこい生きているという報告記でもある。

一 満二十周年記念の日に

七月九日は、作家松下センセの開業記念日である。

松下センセの最後の豆腐造りが一九七〇年七月八日までで、翌九日からペン一本の生活へと転身したのであり、かぞえればこの夏が満二十周年となる。本来なら、作家生活満二十周年の記念パーティーでも華やかに開催し、日頃おつきあいをいただいている方々を御招待申し上げるくらいのことではしなければならぬのだから、とてもそういう状況でも心境でもない。

よくぞまあこの二十年間、綱渡りのような生活を続けてきたなあという感慨のみしきりで、作家として二十年を琢磨してきたという自負も安定感も微塵もないというていたらしく。来年の一家の生活がなんとなるのだろうかという恒常的な不安は、いまま松下センセの薄い背を灸^{あぶ}り続けてやまない。

今年ももう半年が過ぎて一年間の収入の見当もついてきているのだが、これがなんとも心細い限りである。

五月に出版した児童向けノンフィクション『どろんこサブウ』（講談社）が唯一頼みの主収入なのだが、これがやっと七〇万円ではない。あとはこれに、どれくらいの雑収入がプラスになるかにかかっている。

雑収入にはどういふのがあるかというと、まず既刊本の増刷による印税というのがある。松下センセがいつも夢みるのは、これまでの既刊本三十三冊が全部生きていて、たとえ年に千部ずつでも増刷になってくれれば、それだけで一年の生計が保証されるだろうにという虫のいい願いだである。

現実には悲惨なもので、松下センセの単行本はほとんどもう〈品切れ〉か〈絶版〉扱いで入手不能とな

っているし、文庫本までが「品切れ・増刷予定なし」というつれない返事が多い。松下センセの代表作の一つで講談社ノンフィクション賞を受賞した『ルイズ——父に貰いし名は』（講談社）でさえが、単行本はもとよりのこと文庫本までが「品切れ」という惨澹たる実情、要するに、この二十年間の実績である三十三冊の作品が、全然財産にはなっていないのである。

それでもかろうじて今年増刷になったのが、文庫版『豆腐屋の四季』と単行本『狼煙（のろし）を見よ』で、両者を合わせての印税収入が約三〇万円。

その他の雑収入というと、新聞や雑誌に書く単発的な原稿料ということになるが、これがまた当てにはならない。なにしろこれはもうまったくの注文待ちで、「そういえば、九州の中津に松下某とかいう、地味な作家がいたなあ。あれにひとつ書かせてみるか」と、どこかの編集者が気まぐれに思い出してでもくれない限りどうにもならない。まして、過激派という恐ろしげなレッテルまでつけられている松下センセを頭から忌避（きひ）する新聞や雑誌が多いのだから、まあせいぜい三カ月に一本の注文があればよしといったところだろうか。収入にして、年にせいぜい二〇万円くらいなのだ。

講演は基本的には引受けないことにしているし、引受けてもほとんどが市民運動関係なので、まず収入として計上するほどのものとはならない。

こんなふうに今年の収入を予測してみても改めてがっくりとなるのだが、このままいくと一年の合計が一二〇万円にしかならない。これではやっていけるはずもなく、あとはもう思いがけない収入による上積み（かき増し）を期待するのみである。

以上の内情によってもお察しの通り、松下センセの生活が安定するためには、一年に三冊か四冊の本を書く以外にないのだが（あるいは、たとえ一冊でもそれが大いに売れる本であればいいわけだが）、それが書けないのだからこの恒常的不安定ぶりも自業自得というほかない。作家としての才能の乏しさゆえの悲劇であるわけで、むしろこの頃ではよくもこの程度の才能で二十年間をしのげたものだという、

自らへの驚きの方が大きい。

こんな綱渡りで二十年間を過ごせたのも、ひとえに洋子という伴侶のおかげだろう。

松下センセの細君である洋子はいま四十五歳だが、人と較べてわが身の貧しさを嘆くとか、人の好運をうらやむとか、人より目立ちたいとか、人にまざりたいとか、そういうおのれの欲といったものを、そっくりどこかに置き忘れてこの世に生まれたのではないかと思えるようなところがある。

おかげで松下センセは細君から、「もっと売れる本を書きなさいよ」とせつかれたこともなければ、「もう、あんたには頼れんから、わたしが働きに出ます」と押しつけられたこともない。どんなに困った状態に追いつめられても、どこから助けが降ってくるんでも信じてるみたいな細君の無欲さと楽天ぶりによって、松下センセは救われてきたという気がするのだ。二人で自転車をつらねて、川辺に弁当を食べに行ったり草花を摘んで廻るだけで充足しているのだから、こんな安上りなカップルもいまいではないか。

細君の母の葬儀から二週間過ぎて、伊藤ルイさん^(註)と梅田順子さんが福岡市から訪ねて下さった。

「洋子さん、長い間の看病大変でしたね。まわりで、あなたを慰労したいという声が多いもんですから、ごく内輪でへ洋子さんカンパ[▽]っていうのを募ったら、皆さんとっても喜んで応じてくださったのよ。——どうぞ、これでお二人で旅行でもなさって、骨休めをしてくださいな」

ルイさんから思いがけない金額の包みを渡されて、細君はみるみる涙を溢れさせてうつむいた。細君の母が肺ガンと診断され、あと半年の命と告げられたのは、一九八八年秋のことだった。細君も松下センセも母にはガン告知をしないまま懸命の看病を続けたが、一年半後の今年五月十二日に母は六十四歳の生涯を終えた。その看病記を毎月松下センセは「草の根通信」に現在進行形で綴り続けたので、読者もまた一年半の経緯を見守って下さったのだ。

結局、松下センセと細君は御好意に甘えることにした。

実は、『どろんこサブウ』の出版記念会を主人公の森田三郎さんとその仲間が企画し、作品の舞台に近い千葉県船橋市で七月八日に催されることになっている。東京湾でほとんど唯一残されている自然干潟を守り抜いた森田三郎さんの苦闘を書いたのが『どろんこサブウ』で、出版記念会の主役も作者よりはサブウこと森田三郎さんということになる。松下センセは一人で出席するつもりだったが、ルイさんたちからの御好意をいただいて細君との二人旅にしようと考え直したのだ。

いや、二人だけの旅ではない。「かあちゃんの写真を持って行こうね」と、細君がいうのだ。細君の母は一度も東京に行くことなく小さな食品店の店番だけで一生を終えてしまった。「先でお店をやめたら、一度日本の首都に行かんとね」といいながら、それが果たせなかった母を写真で連れて行こうというのである。

そこへ、もう一人割り込んできたお邪魔虫がいる。まだ夏休み前から留守番役をさせるつもりだった杏子が、学校を休んでついて来るといふ。出版記念会の会場からデイズニールランドがごく近いと知って、そちらが狙いなのだ。

「よろしい。こんな機会はめったにないのだから、三人でばあちゃんをデイズニールランドに連れて行ってあげよう」と、松下センセは気前よく応じることにした。

出発まで一週間に迫った日の夕刻、電話が鳴って細君が「なんだかとっても声のきれいな女の人からよ」といふ。

「初めてお電話をします。わたしは二期会に所属していますソプラノの中谷といいます」と名乗る声が、成程細君のいうように張りを帯びて響く。

用件は思いがけないことであった。

「東京室内歌劇場・歌と朗読の夕べ」という音楽会が新宿モーツァルトサロンで催されることになり、

中谷美恵子さんが歌唱するのだが、なんとその歌の合間に朗読されるのが松下センセの短編小説「絵本」なのだという。

クラシックの世界にはとんとオンチな松下センセのことだから、中谷さんの名も知らないのだが、多分その世界では著名な人らしい。ピアノストも日本で一、二といわれる人なのだと紹介された。朗読もベテランの声優として知られた山内雅人さんだという。どうやら、並みの音楽会ではないらしい。

「大変な光栄です。どうぞ御自由にお使いください」

著作権者である松下センセは、かなり興奮気味に返事を返した。

「そうですか。御許可をいただいてほっとしましたわ。近ければ、センセをぜひ御招待したいところなんですけど……」

「あもう、それはいつのことですか」

「それがもう迫っていますよ、七月九日の夜なんですよ」

「えっ、七月九日ですか！ わたしはちょうど上京してますけど……」

「えーっ、ほんとですかあ！ なんとという不思議な偶然でしょう。それじゃあ会場で作者御本人を紹介できるわけですね。朗読の山内さんも、とてもセンセに会いたがってたんですよ」

電話の向こうで、今度は美しい声の主が興奮している。

「はい、必ず行きます」

松下センセはきつぱりと約束した。

ほんとに、この世は何が起きるか分らない。

松下センセの作家生活満二十周年記念日は、なんとモーツァルトサロンなどというクラシック音楽の会場で舞台に立つという、ほとんど想像を絶した光景が現出することになるらしいのである。

「モーツァルトサロンということになると、おれも蝶ネクタイが必要なんじゃないだろうか」

松下センセが開口一番に洩らした疑問に、小さな細君は早くもおびえてしまつて、

「あんだ、そんな所に顔を出さん方がいいんじゃないの？　せっかく『絵本』の感動でみんながしんみりしているところに、あんだが出てきたら作品世界のイメージがいつぺんにこわれてしまうんじゃないの？　やめようよ」と、実にもつともな指摘をしてくれる。

「うん。その危険性は十分にありうる気がする。あれは若い頃に書いた作品だからなあ。こんなに髪が薄れた作者が登場したら、みんなガクツとなるかもしれない。——それはおれも認めるんだが、しかしこんな体験は生涯に二度とないだろうしな。おれはたとえ蝶ネクタイをつけてでも行ってみるよ」

蝶ネクタイのときはタキシードということになるのだろうか？

「わたしは御免よ。東京まで行つて、はらはらしたくないわ。行くならあんだ一人で行つてよ。わたしは杏子ちゃんと、夜までディズニールランドにいますからね。ディズニールランドは夜のパレードがきれいちゆうたもん」

晴れがましさに対しては本能的に身をすくめてしまふ細君からは逃げられてしまつたが、松下センセはたとえ彼女と別行動となつても、この得難い機会を逃がすつもりはない。

ひょつとしたら舞台で花束くらいはいただけるのではないかと思うと、ニタニタと笑いがこぼれてくる。満二十周年のこのうえない記念ではないか。

フフフ、諸君、氣をつけたまえ。

この夏、松下センセはひとときわ美声を澄ませて、あちこちで口走ることになるかもしれない。

「いやあ、このまえ新宿のモーツァルトサロンでね、有名なソプラノの中谷美恵子さんと共演しちゃつてねえ……」

(注) 松下センセのノンフィクション『ルイズ——父に貰いし名は』の主人公で、「草の根通信」の常連執筆者。梅田順子は彼女の親友。

二 泣いていました

新宿モーツァルトサロンでの「歌と朗読の夕べ」の最後をしめくくったのが、声優山内雅人さんによる「絵本」の朗読だった。

舞台の椅子に座る山内さんだけがスポットライトに浮かび、BGMで波の音が静かに流される。静まりかえった会場に、山内さんの声だけが「絵本」の世界を紡ぎあげていく。会場が暗いことをさいわいに、松下センセは^{こゝろ}泳え切れずに頬に涙を伝わせていた。

「太古の光源を発した光が暗黒の宇宙を奔り抜けるように、Fよ、君の最後の心を託した絵本『もたらう』が、今確かに私の掌上にある」

読み終えた山内さんが、明るくなった舞台に立上った。

「私はこの『絵本』を読むたびに、いつかは作者とお会いたいと思いつづけていました。それが今夜、ここにその松下センセがおみえになっています。御紹介します」

山内さんに誘われ拍手の中を舞台へとあがっていく松下センセは、頬の涙がもう乾いているだろうか、そのことばかりに気をとられていた。念のために報告しておく、この夜の松下センセはグレイのスーツにノーネクタイであった。

以下に、その夜の舞台での挨拶を再現する。